

写真のリアリティ再考：写真の観賞における「現実」の性質と位置付け

江本，紫織

<https://hdl.handle.net/2324/4474900>

出版情報：九州大学，2020，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 江本 紫織

論 文 名 : 写真のリアリティ再考—写真の観賞における「現実」の性質と位置
付け—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

私たちは日々、多くの写真を目にしている。それらの写真は、報道、広告、SNS 上でやり取りされる個人的なものまで多種多様であり、私たちはそれぞれの写真にふさわしい見方を無意識のうちに選択しているように思われる。たとえば、撮影された過去の現実を意識することもある。写真に写し出された対象を実際に見聞きするような未来の経験がイメージされることもある。一方で、これらの写真を「写真かどうか」を判別することすらなく、日々接する莫大な数の情報のうちの視覚情報の一つとして処理することもある。AI によって生成された画像や成功な CG 画像が「写真」とみなされ、「写真」のように観賞されることもあるなど、現代における「写真」と観賞の在り方は、実に多岐にわたる。

このような「写真」を通して、私たちは何をどのように意識しているという問いに答えることの難しさは、大きく2つに分けることができるだろう。一つは、前述の通り、そもそも写真の性質を一つに集約することの難しさである。写真はその発明当初から、様々な二項対立構造の中で論じられてきた。写真および観賞の多様性に呼応する形で、写真の性質を問う写真論それ自体も複数の帰結を行き来しながら、未だ理論化のための新たな糸口を見出せずにいるように思われる。

また、二つ目の難しさとして、写真が常に技術変化の途上にあることが挙げられる。たとえば、写真の独自性が写真の生成プロセスを論拠に論じられる場合、写真のデジタル化のような大きな技術変化に従来の議論を適用できなくなる。さらに、技術変化によって加わる新たな要素は、写真技術や性質特有のものであるとは限らない。ネットワーク上でやり取りされる視覚イメージやその基盤となるメディアの多くは、同一のデジタル機器やプラットフォームを共有するものである。このことは、写真についての研究が関連諸領域へと広がり、新たな事象に対する研究を活性化する一方で、写真性について論じる意義を薄れさせてもいる。

このような状況において、改めて写真性を問うことは本当に無意味なのだろうか。現在の状況を前向きに捉えるならば、他の視覚イメージやメディアとの境界が曖昧であることは、これらのイメージ、メディアと写真が多くの共通項を持つと言い換えることができる。写真の性質

について考えることは、同様の機器やプラットフォームを利用する他の視覚イメージ、メディアの性質を明らかにする可能性がある。また、特定の視覚表象が「写真みたい」と評されることがあるように、写真的な見方、扱い方が存在することも確かである。無意識に写真とみなす際の「写真」とはどのようなものであり、そこに含み得るものと含み得ないものとの違いは何なのか。これらの非常に感覚的な区別の要因を説明することなく、写真性についての議論を切り捨てることは性急にすぎるだろう。では、どうすれば性質的にも技術的にも絶え間なく変化し続ける写真を再考し、様々な変化に耐え得る形で理論化し直すことができるのだろうか。

方法の一つとして、従来の写真論と現在の写真の共通点を見つけ出し、捉え直すこと、そして将来的な変化も含めた写真技術や関連諸技術を変数として扱うことのできるような、より大きな枠組みを再設定し直し、その中に「写真」を置き入れることが考えられる。本稿では、技術変化に左右されない共通項として、写真の観賞においてどのような現実がどのように意識されるのかに注目することにしたい。

写真の観賞において意識される「現実」の性質とその位置付けを明らかにするために、本稿は大きく分けて3点の考察に取り組む。第1部「写真の観賞と現実」では、写真の観賞の多様性を便宜的に類型化し、それらの観賞を写真の生成プロセスを論拠とする写真論によって説明することの有効性と限界を検討する（第1章「観賞における写真と現実」）。第2部「再構成された現実」では、生成プロセスに変わる着眼点として、観賞において意識されるものの性質と構造に注目する。まず、観賞において意識される「現実」について検討するため、観賞において意識される時間性・空間性について整理する（第2章「写真の時間性・空間性」）。また、写真の観賞によって意識される「現実」が「再構成された現実」であると仮定し、その形成プロセスと時間的・空間的位置付けを問う（第3章「「再構成された現実」の構造」、第4章「「再構成された現実」の位置付け」）。

第1部、第2部において従来の議論を再検討し、観賞における意識に注目した議論を展開するだけでは、写真の独自性の議論から離れ、写真の意味や性質が写真以外のものによって規定される文脈主義的な議論を推し進めるという従来の写真論の構造を繰り返すにすぎない。そこで第3部「「再構成された現実」のリアリティ」では、観賞において意識される「現実」を、より大きな枠組みの中に置き入れることで、写真のリアリティの意味と構造を再考する。そのため、写真の観賞によって「再構成された現実」が、虚構的な現実や事実としての現実とどのように関わるのか（第5章「写真の現実性と虚構性」）を検討する。さらに、そのような関わり方が、撮影から観賞までの様々な写真行為や要素からなる「写真」が可能にするものであるとすれば、「写真」において写真単体はどのような役割を果たすのかを明らかにする（第6章「写真と物理的現実の有機的連関」）。以上の方法により、写真の観賞において意識される「現実」の性質と位置付けの点から、写真のリアリティを再考する。これによって、写真性を捉え直す一つの方法、つまり様々な技術、メディア、性質の間を揺れ動き、明確な輪郭を持たない「写真」について現在考え得る一つの見解を提示することを試みる。